

令和7年度 獨協医科大学大学院看護学研究科博士後期課程入学試験(第2期)

【小論文】 出題意図・解答例

問題 1

【出題意図】

本研究科のアドミッションポリシーは「1.保健医療福祉専門職者としての知識並びに職業倫理を有する人」「2.保健医療福祉の専門分野における国外の動向及び実践上に課題意識を有し、解決に取り組む意欲を有する人」である。求める能力として「保健医療福祉専門職者としての知識、職業倫理、実践上の課題意識」であることから、これらの能力を査定・評価するために、本課題を設定する。

【解答例】

看護実践には、エビデンスが確立されていない看護ケアや技術がある。また解決が難しい看護課題を有する複雑困難事例も増え、従来の問題解決志向では解決できない実践上の課題がある。また看護学を体系化し学問として確立するためには、科学的手法を用いてケアの検証や開発等の成果が求められることから、研究に取り組む必要がある。

私が取り組んだ研究を具体的に述べる・・・

これらの経験から、看護実践者が臨床で研究に取り組むメリットとデメリットについて以下に述べる。

1. 看護実践者が研究に取り組むメリット

1) 専門的知識や技術を獲得し、専門性の向上と自己成長

日々進化する医療分野において、看護師が研究を通じて最新の知識や技術を探求することで、最新の知識・技術の獲得につながり、専門職として常に学び続けることで自己成長に繋がることが期待できる。

2) 教導する保健 医療・福祉チームへの貢献

複雑困難事例にはチームアプローチが不可欠であり、患者・家族に最も近い立場にあり、チーム全体に情報を共有する重要な役割を担う看護師が、研究で得た知見をチームで共有することでより質の高い保健・医療・福祉の提供に貢献することが期待できる。

3) 専門職としてのキャリアアップの機会

研究に取り組むことで日々の看護実践を振り返ることで、専門職者としての自己の課題に向き合う機会となり、自己成長・教育の機会となり、専門職として成熟することが期待できる。

2. 看護実践者が研究に取り組むデメリット

1) 研究に取り組む時間の捻出

本来の業務に加え、研究に要する時間も必要になることから、生活リズムを崩しやすく、また心理的にも研究に対する負担感を抱きやすい。

2) 研究費の確保

研究に係る経費の保証はほとんどなく、また醸成金の獲得もなかなか難しく、必要な研究経費の確保が難しい。

問題 2

【出題意図】

あらゆる看護実践において、看護の対象を理解することが基盤である。

対象の理解の幅や深さについて、段階的系統的に説明する、説明力と論述力を問うため。

【解答例】

看護における対象理解とは、単なる疾患やバイタルサインの把握にとどまらず、対象者（個人、家族、集団、地域）を「生活者」として全人的に捉え、その人固有の特徴、価値観、生活背景、経験、そしてニーズを深く理解することである。

具体的には

- 個別性の重視：同じ疾患であっても、年齢、発達段階、健康状態、生活環境（病院か在宅かなど）、人生の価値観は人それぞれ異なります。これらの個別性を踏まえ、その人らしい生き方を尊重したアセスメントとケアを行うための基盤となる。
- 生活者としての視点：病気や障がいによって生じる辛さや違和感だけでなく、その人が日々どのような生活を送り、何を大切にしているのかといった「生活の意味」に焦点を当てて理解する。
- 援助的人間関係の構築：対象の理解は、看護師と対象者との間に援助的な人間関係を築く上で不可欠である。対象者が「理解されている」と感じることは、安心感の提供につながり、信頼関係の基盤となる。
- 適切な看護計画の立案：対象者から得た「生きた情報」に基づき、個別のニーズに合った適切な看護計画を立案・実施することで、対象者の健康の保持・増進、回復、苦痛の緩和、QOL 向上に貢献する。

以上のことなどを、自らの実践経験を具体的に記して、論述する。